

OP I における韓国語話者の「の」の使用と習得

坪根由香里

要 旨

本研究は韓国語話者のOPIデータを用いて、準体助詞「の」について自然発話での使用状況を調査し、その習得順序を探るものである。

調査の結果、本稿で提案した習得順序は、1.の代用語、の名詞化、2.のだ（説明告白、説明教示）、ののだが前置き、3-1.ののだが（終助詞、逆接）、3-2.のではないか（推測、主張）、4-1.のか説明求め、のだ強調、4-2.のだ感嘆、のか（自問、疑問）、というの（一般化、内容）のではないスコープ、であった。その他、①上のレベルに行くほど使用カテゴリー数が増加、②上級上段階から「のだ」「ののだが」の使用増に伴い全体の使用数が急増、③「のだから」は最も習得困難、ということがわかった。

キーワード：「の」 OP I (oral proficiency interview) 韓国語話者
習得 誤用分析

1. はじめに

日本語の文を生成する上で、準体助詞「の」は名詞の代用語として用いられたり、前接する用言を名詞化する役割を果たしたり、また、「のだ」の形で文末に用いられればムードを表したりと、様々な用法になって現れる。文末のムードを表す「の」は必須でない場合もあるが、「の」を付けることによってより日本語らしくなったり、逆に過剰に使用することで本来の意図とは異なるニュアンスが含まれてしまう場合もあり、誤解を招く恐れもある。このようなことから、「の」の習得は、日本語で正しく意思を伝えるために欠かせないものであると言えるだろう。本稿は準体助詞「の」の各用法が学習者の自然発話の中でどのように現れ、どのように習得されていくのかを考察することを目的とする。

筆者は、坪根（1997）で「ものだ」「ことだ」「のだ」の各用法について理解難易度調査、産出（production）調査を行った。理解難易度調査は短い文脈の中で「ものだ」「ことだ」「のだ」の中から適当なものを選ばせるもの、産出調査は英語で状況を示し、その場面に適した発話を書かせるものであったが、この産出調査では、確実に使用してもらうため「ものだ」「ことだ」「のだ」のどれかを使うよう指示しており、自然な発話とは言えなかった。言語の「習得」を言うためには自ら産出できることが必要であり、可能な限り自然発話を分析するこ

とが望ましい。

そこで、本研究では韓国語話者のOPI（oral proficiency interview）データを用い、準体助詞「の」の各用法について自然発話での使用状況を調査した上で、それに基づいて可能な限りその習得について横断的に考察し、習得順序を探る。また、資料中の誤用についての分析も試みる。

2. 対象

本研究で分析対象としたデータは、OPIデータの文字化資料（KYコーパス¹⁾）である。KYコーパスは英語・韓国語・中国語話者各30名、計90名のデータからなるが、本研究ではそのうち韓国語話者30名分を対象とした。レベル分けは初級5名、中級10名、上級10名、超級5名である。

これまで横断的研究においては「日本語能力の規定は学習年数や、被験者が属する教育機関におけるクラス分けに基づくなど、極めて恣意性の高い基準で行われているのが現状」（鎌田1999：227）であった。本資料はOPIという客観的かつ汎言語的基準により能力測定が行われており、上に述べたような研究の不備を克服するものである（鎌田1999：227）。また、各学習者のそれまでの教育環境、教育内容等が異なる場合、それらの学習者のデータを横断的研究の対象として扱うためにも、OPIのような客観的基準による能力測定は有効だと言える。

以下で学習者に付けられている番号は、始めのKが母語が韓国語であること、2つ目のローマ字はOPIにおける判定結果（初級N、中級I、上級A、超級S）を表す。また3つ目にローマ字が付いている場合はサブレベルを表し、各レベルの中で下がL、中がM、上がHとなっている。例えばKIMなら母語が韓国語、中級の中のレベルであることを示す。

3. 調査の方法

- 1) 資料より「の」の用例を取り出し（1161例）、それらを用法毎に分類し、出現数の少ない表現形式は考察対象から除外する（除外後の用例:1107例）。
- 2) 各用例の正誤判断を行う。その際、当該用法を使うべきところで使っていれば接続形等の誤りがあっても正用とする。非用については、明らかに使用すべき箇所で使用していない場合のみ誤用に含め、ムードを表す用法等、その使用が母語話者でも判断の分かれる可能性があるものについては誤用に含めない。
- 3) 各用法の正用、誤用の数を学習者別に一覧にし、学習者毎の正用カテゴリ数（正用した用法の種類の数）を出す。
- 4) レベル別に各用法の正用者数をまとめ、それをもとに正用者が60%以上の

用法、正用者が30%以上60%未満の用法を取り出して表を作成する。それを基に習得順序を考察する。

- 5) 複数の学習者に見られた誤用について分析する。

4. 用法分類

「の」の用法の中で本研究で出現したものを使用例と共に示す(*は誤用)。なお、テストの相槌は省略、長い文で用法に無関係の部分は途中省略してある。

1) 名詞の代用語

この中には下記aのような格助詞+被修飾語の被修飾語部分が省略されたものと、bのような他の名詞の代用語として用いられているものの両方を含める。

- a. でも私のじゃないですよ。(KIM06)
b. 社会の風習ののでしょうか、そういうのが存在してて(KAH01)

2) 用言の名詞化

大阪で暮らすのは、あー、楽しみです。(KIM01)

3) のだ²⁾

「のだ」の「の」は元々は準体助詞であり、「のだ」で下記のような意味を持つのでなく、文脈の中で様々な意味を持つかのように振る舞うのだが、本研究ではそれを踏まえた上で、下記の文脈での使用という意味で分類し考察する。

坪根(1997)では先行研究に基づいて分類を行った坪根(1994)をもとに、「説明」「前置き(のだが)」「意思」「命令」「非難」「スコープ」の6つについて調査しているが、本稿では吉田(1988)も参考にし、以下のように分類した。吉田(1988:48)は「告白」を「話手だけが知っているはずの情報を聞き手に提出する」もの、「教示」を「聞き手が知らないことが確実であると思われる情報を話手が提出する」ものとしているが、本稿ではこれらは共に「説明」に含まれると考え、「説明/告白」「説明/教示」とした。

- a. 説明/告白：趣味は、あんまりないんです。(KA03)
b. 説明/教示：学院と言うんですよ。(KAH03)
c. 強調：もうすっごいんですよねー。(KAH03)
d. 意思：T：あーそうですか、来週の月曜日だったら空いていますがいかがでしょう S：いや、わたしはいつでもいいんです。(KAH02)
e. 感嘆：急に、ほん、遠くに行ったんですね。(KS01)
f. 発見：彼らもやっぱり私達とそう変わらないんだなというのを感じたりすると・・・(KAH04)³⁾
g. 命令：いつも礼儀正しくしなきゃあだめなんだって、あの、両親からも教わるし、(KAH01)

- h. 非難：先生はアドバイスでしょ、それが、でも、アドバイスのかたちになっ
てないんです。(KAH02)
- i. 確認：やっぱりなんかあいさつというのは割と自分が、知っている人のこと
をいうんですよね。(KS07)
- j. 再認識：日本では初めちょっとだめでも、だんだん伸びて来たら先生が、あー
やっぱ、やる気があるんだってことを認めてくれるからね。(KS09)

4) のか

a 「自問」は、質問の形式であるが相手に聞いているのではなく、自分に問い
かけ考えているもの（以下の「自問」も同じ）、e「スコープ」は文の構造上不
可欠なもの（野田1997）である。

- a. 自問：自分のなんて言うんですか、疲れをいやしていくという話の (KS09)
- b. 疑問：どうして日本人は同じ国の人なのに、どうしてその人達を、こう受け
入れようとしないのかなって疑問を抱いてねー。(KAH04)
- c. 説明求め：T：土が流れる現象 S：それはなんで流れるんですか。
(KIH02)
- d. 確認：T：今年は特別寒いんですよ。S：特別寒いんですか。(KIM05)
- e. スコープ：微笑みを浮かべながら死ぬのか、苦しみながら死ぬのか (KS07)
- f. 驚き：あっ、先生、まだ見てないんですか。(KIM05)
- g. 非難：*お金を全部返したいんですけどどうかならないんですか。
(KAH03) ⁴⁾

5) というの

aは先行する具体的な名詞句／文の内容を抽象的概念にするもの、bは具体的内
容に続けて用い、「という」が引用的に用いられるもの、cは先行する事物の意
味を説明するもの、dは先行する事物について解釈を述べるものである。

- a. 一般化：自分の趣味とか理想というのに近付こう近付こうとするから(KS09)
- b. 内容：日本人はこうだろうっていうのがあったのに (KS06)
- c. 意味・定義：オンドルというのは、床の下にあちいものが、床から (KIM06)
- d. 解釈：その中でもその、べったり、っていう所が、どこかにあるんですよ、
関西の人っていうのは (KAH04)

6) というのか（自問）

もしもの場合ふたりでもね、子供達がいてその中で決定できないそういう、困
難っていうんですか、そういうのが入った場合は、(KS01)

7) のだから（理由）

中学校は一寄付したらできるものはないと思うんですね、全部試験で決まるん
だから (KAH03)（「試験で決まるから寄付しても有利なことはない」の意）

8) のだが

- a. 前置き：はつきり覚えてないんですけど、失敗したようです。(KIM05)
- b. 終助詞：今、思い出せないんですけど。(KAIH01)
- c. 逆接：ラジオは聞かないんですけど、テレビはよく見ます。(KA03)

9) のではないか

- a. 推測：今頃塾の先生を続けていたんじゃないかな。(KAH03)
- b. 主張：考え直したほうがいいんじゃないかと思うんですよ。(KAH01)
- c. 疑問：川釣りとかしようとなさろうと思うんだったら結構、あの費用とかかかるのではないですか。(KS09)
- d. 非難：おまえカンニングかして、なんかしたんじゃないかという風に言われがちですけどね。(KS09)

10) のではない(スコープ)

まだできないんですね、やりたくないじゃなくて。(KS06)

5. 結果と考察

5.1. 各用法の出現分布の概要

表1は学生別に各用法の使用数を示したものである。正用数/誤用数で示し、数字が1つのものは正用の数を表す。表の2枚目最後に総使用数と正用カテゴリ数(正用した用法の種類の数)を示してある。

代用語、及び名詞化の用法は、共に中級-中で正用が出現し、使用数はレベルが上がるにつれて増加している。名詞化用法はそれによって従属節を作るものであり、レベルが上がるほど複雑な文が多く生成されていることがここからわかる。

「のだ」は説明告白、説明教示が圧倒的に多いが、中級、上級では誤用も多い。これらの誤用は超級で消える。それ以外の用法は上級-上以降で使用されている。

疑問形である「のか」は中級-中から少数見られ、超級になって使用数も種類も増える。ここでも中級、上級で説明を求める用法の誤用が見られる。

「というの」は「一般化」「意味・定義」が中級-中で、「内容」「解釈」が上級で少数現れているが、超級になると「一般化」「内容」がほとんどの学習者によって使用され、使用数も多くなっている。つまり、この2つは上級から超級で急激に習得が進むと推察される。

「というのか」「のか」(共に自問)の形も上級-上以降で使用される。これらを使うことにより、自分の中で表現を選択したり、思い出したりしているような時にも話が中断せず、自然な流れで発話を進めることができるようになると考えられるが、上級-上の段階になればそのようなストラテジーが使えるということがここからは示唆される。

表1 出現分布表 (の1107例)

学習者の 代用語	の 名詞化	のだ 説明告白	のだ 説明教示	のだ 強調	のだ 意志	のだ 感嘆	のだ 発見	のだ 命令	のだ 非難	のだ 確認	のだ 再認識	のか 自問	のか 疑問	のか 説明求め	のか 確認	のか スコープ	のか 驚き	のか 非難	
KNL01																			
KNL02																			
KNM01																			
KNH01		0/3																	
KNH02																			
小計	0	0/3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
KIL01																			
KIL02																			
KIM01		2	1/1	2										1					
KIM02	1	5	2/1	4															
KIM03	1	3	1																
KIM04		3												0/1					
KIM05	2	1	4/1	2											1		1		
KIM06	1	1																	
KIH01	2	3	11/2	23	0/1									1			1		
KIH02	1	4												1					
小計	8	22	19/5	31	0/1	0	0	0	0	0	0	0	0	3/1	1	0	2	0	
KA01		4/1	13/2	4															
KA02	1/1	7	4	4															
KA03	1/1		4/5	2/3															
KA04		1																	
KA05	1	2	1	3															
KA06	1	1																	
KAH01	3	2	4/1	9/1				2						0/2					
KAH02		5	5/1	12/2		2			2					0/1					
KAH03	2	6	29/8	39/4	3													0/1	
KAH04	4	6	15/1	5	2		3	1					2						
小計	13/2	34/1	75/18	78/10	5	2	0	3	3	2	0	0	2	0/3	0	0	0	0/1	
KS01	4	3	15	10	1/1							3		1					
KS03	3	8	21	7	1							5							
KS06	7	8	63	5	2							3	2	1					
KS07		11	14	11	1					1			1		3	3			
KS09	11	7	3	1		1					1	12	3	1		1			
小計	25	37	116	34	5/1	1	3	0	0	0	1	1	23	6	3	3	4	0	
使用数計	46/2	93/4	210/23	143/10	10/2	3	3	3	3	2	1	1	23	8	6/4	4	4	2	0/1

学習者	というの 一般化	というの 内容	というの 意味・定義	というの 解釈	というの か 自問	のだから	のだから 前置き	のだから 終助詞	のだから 逆接	のではない か 推測	のではない か 主張	のではない か 疑問	のではない か 非難	のではない か スコープ	総使用数	正用カテ ゴリー数
KNL01															0	0
KNL02															0	0
KNM01														0/1	0/1	0
KNH01															0/3	0
KNH02															0	0
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0/1	0/4	平均0
KIL01															0	0
KIL02															0	0
KIM01							3	2	2						13/1	7
KIM02															12/1	4
KIM03								0/1							5/1	3
KIM04	1														4/1	2
KIM05							5								16/1	7
KIM06			1												3	3
KIH01			3				8	1							53/3	9
KIH02			1				1	2							10	6
小計	1	0	5	0	0	0	17	5/1	2	0	0	0	0	0	116/8	平均4.1
KA01							6	2	1						30/3	6
KA02	1					0/4	9	2/1							28/6	7
KA03							6/1		3	1					17/10	6
KA04							1	0/1						0/1	2/2	2
KA05				1		0/1	2	1	2						13/1	8
KA06															2	2
KAH01			1		1		21	10	2	2	1				58/4	12
KAH02						0/1	13	2	6		1				48/5	9
KAH03						1/5	24	4/1		1	1				110/19	10
KAH04	10	1		2	5		26	12	3	2					99/1	16
小計	11	1	1	3	6	1/11	108/1	33/3	17	6	3	0	0	0/1	407/51	平均7.8
KS01	14	4			4		15	11	4	1				1	92/1	16
KS03	1					0/1	11	3	2	1	3/1				67/2	13
KS06	1	11			1		32	16	2	1	1			3	159	17
KS07	9	6/1					19	9	6	6				2	103/1	16
KS09	4	2				0/1	20	22	2	1	1	1	1		95/1	19
小計	29	23/1	0	0	5	0/2	97	61	16	10	5/1	1	1	6	516/5	平均16.2
使用数計	41	24/1	6	3	11	1/13	222/1	99/4	35	16	8/1	1	1	6/2	1039/68	

「のだから」はレベルを問わず誤用が圧倒的に多く、この形は超級になっても正しく使用することが困難であることを表している。

「のだが」は中級-中から使用され始め、上級になるとほとんどの学習者が使用できるようになる。特に中級-上以降は使用数が増加し、より自然な話し言葉の日本語の形になっていると言えるだろう。

「のではないか」も上級になって現れ、間接的表現を使って意思を表すようになる。

スコープは「のか」「のではない」とも超級になって正用が現れる。この「の」は名詞化の「の」に近いものとされており（野田1997：32-36）、名詞化の用法が中級で使用されていることを考慮すると、もっと早い時期に現れるとも考えられるが、本データにおいては超級まで正用が現れなかった。

正用カテゴリ数を見ると、初級は0、中級で4.1と増え、上級でその約2倍の7.8、超級ではさらに約2倍の16.2となっており、レベルが上がるにしたがって順調に使用カテゴリが増えている。使用数も徐々に増加しているが、特に上級-上から使用数が急増する。ただし、使用数の多さは必ずしも母語話者に近づいているとは判断できず、母語話者との比較をする必要があるだろう。

5.2. 習得状況

表1より各レベル毎の正用人数（1つでも正用のあった人の数）をまとめたものが表2である。習得状況を細かく見るため、表2では上級（6名）と上級-上（4名）を分けて集計した。

更に、表2を基にレベル別習得状況を表3としてまとめた。OPIという性格上、多くの出現を期待できない用法もあり、各用法を同じように議論することはできないが、少なくとも多くの学習者によって使用（正用）されているものについては、そのレベルで習得が進んでいるものと考えることができる。そこで、各レベルで60%以上の正用者がいる用法を習得段階が高いもの、30%以上60%未満のものを少なくとも習得が始まったと考えられるものと規定し、それをまとめたものが表3である。初めてその割合に達した用法が各欄に入れてある。これ以外の用法については正用者が少なく、習得について議論することはできないため、表2に基づいて使用カテゴリの広がりについて言及するに留めることにする。以下、断りがない限り表3を基に述べる。

初級では正用が見られない。

中級以降で代用語、名詞化用法が多く見られるようになり、これらは中級段階で一気に習得が進むと思われる。「のだ」（説明告白、説明教示）、「のか」（説明求め）、「というの」（意味・定義）、「のだが」（前置き、終助詞）も

表2 レベル別正用人数（一つでも正用のあった人の数）

レベル	の 代用語	の 名詞化	のだ 説明告白	のだ 説明教示	のだ 強調	のだ 意思	のだ 感嘆	のだ 発見	のだ 命令	のだ 非難	のだ 確認	のだ 再認識
初級（5）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級（10）	6	8	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0
上級（6）	4	5	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0
上級上（4）	3	4	4	4	2	1	0	1	2	1	0	0
超級（5）	4	5	5	5	4	1	3	0	0	0	1	1

レベル	のか 自問	のか 疑問	のか 説明求め	のか 確認	のか スコープ	のか 驚き	のか 非難	というの 一般化	というの 内容	というの 意味・定義	というの 解釈	というのか 自問
初級（5）	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級（10）	0	0	3	1	0	2	0	2	0	3	0	0
上級（6）	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0
上級上（4）	0	1	0	0	0	0	0	1	1	1	1	2
超級（5）	4	3	3	1	2	0	0	5	4	0	0	2

レベル	のだから 理由	の다가 前置き	の다가 終助詞	の다가 逆接	のではない か 推測	のではない か 主張	のではない か 疑問	のではない か 非難	のではない スコープ
初級（5）	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中級（10）	0	4	3	1	0	0	0	0	0
上級（6）	0	5	3	3	1	0	0	0	0
上級上（4）	1	4	4	3	3	3	0	0	0
超級（5）	0	5	5	5	5	3	1	1	3

は正用人数が60%以上のもの

は正用人数が30%以上60%未満のもの

表3 レベル別習得状況

レベル	習得段階（高）：正用者60%以上	習得段階（初）：正用者30~60%
初級	（正用者なし）	
中級	の代用語 の名詞化	のだ説明告白、説明教示 のか説明求め というの意味・定義 のだが前置き、終助詞
上級	のだ説明告白、説明教示 のだが前置き	のだが逆接
上級上	のだが終助詞、逆接 のではないかと推測、主張	のだ強調、命令 というのか自問
超級	のだ強調、感嘆 のか自問、疑問、説明求め というの一般化、内容 のではないとスコープ	のかスコープ

この段階で習得が始まっていると考えられる。

上級では中級で正用者数が30~60%だった「のだ」（説明告白、説明教示）、「のだが」（前置き）の正用者が増え、習得段階が進んでいる。「のだが」（逆接）も習得が見られるようになる。

上級-上では、中級、上級でそれぞれ習得が始まった「のだが」（終助詞）、「のだが」（逆接）の習得段階が進み、それまでほとんど正用者のいなかった「のではないかと」（推測、主張）がこの段階で高い正用率を示すようになる。「のだ」（強調、命令）、「というのか」（自問）もこの段階で習得が見られるようになる。表2を見ると、「のだ」のその他の用法も上級-上になって若干見られるようになり、「というの」も幅広い用法で使われるようになる。このレベルは使用用法が広がる段階である可能性がある。

超級では、5名全員に名詞化「の」、「のだ」（説明教示、説明告白）、「というの」（一般化）、「のだが」（逆接、終助詞、前置き）、「のではないかと」（推測）の正用が見られる（表2）。これら以外に、「のか」（自問、疑問、説明求め）、「のだ」（強調、感嘆）、「というの」（内容）、「のではない」（スコープ）の各用法は習得が進んでいると考えられ、「のか」（スコープ）も習得が始まっていると言える。

以上レベル別習得状況について述べてきたが、ここから習得順序を探ってみる。習得段階初（正用者30%以上60%未満）から習得段階高（正用者60%以上）に段階が進んだ時点で習得されたとし、より早く習得段階初に現れ、より早く習得段階高に達したものを先に習得されたものと規定すると、以下のような順序が提案できる（表4）。なお、「というの」（意味・定義）、「というのか」（自問）、「のか」（スコープ）は習得段階高に現れていないため、考察対象から外した。表中、3と4は習得段階初に早い段階で現れていたものを3-1、4-1とした。（ ）内は習得段階初に現れた順序を表す。

表4 習得順序

習得順序↓	1	の代用語、の名詞化	
	2	のだ説明告白、のだ説明教示、のだが前置き	
	3	3-1	のだが終助詞、のだが逆接（のだが終助詞→のだが逆接）
		3-2	のではないかと推測、のではないかと主張
	4	4-1	のか説明求め、のだ強調（のか説明求め→のだ強調）
		4-2	のか自問、のか疑問、のだ感嘆、というの一般化、 というの内容、のではないスコープ

韓国語は日本語と構造が似ていると言われるが、「の」は韓国語の「것」にあたる。「것」は「もの、こと、の」を表し、日本語の代用語、名詞化の各用法はこれに置き換えられるため、これらの用法は韓国語話者にとって習得が容易なものだと推測できる。筆者が韓国語話者に確認したところ、「のだ」の説明/告白の用法は「거든요」、「のだ」の説明/教示は「잡니다、거예요」（「거」は「것」の縮約形）に近く、共に非常によく使われる表現だということである。「のか」は自問以外の用法には「잡니까」が使われる。また、「것」は含まれてはいないが、「のだが」（前置き、終助詞）は韓国語の「는데、는데요」に近いという。つまり、「のだ」「のか」「のだが」の以上の用法は、韓国語話者に比較的抵抗なく使われている可能性がある。

最後に、坪根（1997）における「のだ」の産出調査と本研究の比較をしてみる。坪根（1997）では①「のだが」（前置き）、「のだ」（説明）は最も早く習得される、②「のだ」（スコープ）は中級後期から上級にかけて習得が進む、③「のだ」（命令、非難）は上級でも正用者はわずかで習得は確認できない、という結果が出ているが、①は表4の通り同一の結果、③も正用者がわずかという点で一致が見られるが、②については本研究では超級になって初めてスコープの用

法において正用が現れ、上級での習得は確認されなかった。

5.3. 誤用分析

誤用が多く出現した「のだ（説明告白）」「のだ（説明教示）」「のか（説明求め）」「のだから」の4つについて、代表的な誤用を示し、分析してみる。

1) のだ（説明告白）

例：T：いつ日本に来ましたか。S：去年の10月に来たんです。（KAH03）

この例では、自分の来日時期について説明しているということで「のだ」を使用しているのだと思われるが、相手の質問に対して単に答えているだけであるので「のだ」は必要ない。このような応答文で「のだ」が用いられるのは、その文をきっかけとして自分の話したいことを提示し、話を続ける場合である（野田1997：140-142）が、上記例ではこの応答で終わっているため不自然になっている。例えば上記例に「でもまだ日本の生活に慣れません」と続ければ正用になる。

2) のだ（説明教示）

例：T：日本人の学生を見て、うらやましいとか、こうしなければいけないと思ったってようなこと S：一番うれしいなことは、・・・また、とってもいいこの施設も、もっているんですね。（KA03）

説明教示は相手が知らない情報を提出するものだが、これは相手が明らかに知っている事象について「のだ」を用いているため不適切になっている。

3) のか（説明求め）

例：これは私の関心、があることなんですけど、あの、日本の物価については、どう思い、お思いになるんですか。（KAH01）

この文はそれ以前の話とは話題が変わっており、文脈上関連づけられるものはないにも関わらず「の」を付けているため、不適切になっている。このような誤用は、詰問調に聞こえるため、人間関係に支障をきたす可能性もあり、早い時期に学習を促す必要がある。

4) のだから

例：わたくしちょっと前ね、もう御飯を食事をして来たところなんですので、とってもしらないんです。（KS03）

この文は、まず「なんですので」という形が不適切だが、「して来たところなんですから」としても間違いである。野田（1997：176-186）によると、「のだから」が用いられるのは聞き手が「従属節の事態を知っているはずだが十分には認識していないときであり、聞き手に十分認識させるために従属節の事態をあらためて示している」ときであり、それによりしばしば非難のニュアンスが生じ

るのだが、上記の例では、聞き手が従属節の事態を知らないにもかかわらず「のだから」を使用している。このような間違いは上級で多く見られ、超級になっても現れている。上記の例は「もう御飯を食事をして来たところなんです。だから、とつても入らないんです。」と、2文に分ければ正用となることから、学習者は説明の「のだ」にそのまま「から／ので」を付けてしまうことで誤用となってしまうものと思われる。指導の際に「のだ」との違いを理解させることが必要である。

以上の1)～3)は韓国語に同じような表現があり、その使用範囲の違いによる誤用だと推測されるが、これについては更に韓国語との対照、韓国語話者に対する調査を行う必要がある。4)の「のだから」は、このような用法を韓国語は持たないためだと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究では準体助詞「の」の各用法について自然発話での使用と習得について考察し、その習得順序についての考察を行った。習得順序については表4にまとめた通りである。その他、本研究からわかったことは、「の」はレベルが上がるに従って約2倍ずつ使用カテゴリー数が増加していくこと、上級-上の段階から「のだ」「のだが」の使用の増加に伴い全体の使用数が急増すること、超級になっても習得が困難なものに「のだから」があること、上級になると間接的な表現、自問の形式等を用い、より自然な日本語を使用するようになること、などである。

本稿は準体助詞「の」の使用を自然発話の中で考察したという点で、先行研究からは一歩進んだといえる。しかしながらOPIというデータの性質上、ロールプレイで仮想場面での発話もあったにしても、全体的に学習者の説明場面が多く、習得まで論じることができない用法もあった。今後は様々な場面を想定し、ロールプレイを活用しながら発話環境を整え、その出現を検討することが必要になるであろう。すなわち、OPIのような自然発話を研究対象とする一方で、ある程度の発話環境の設定をした研究も行われる必要があるだろう。また、横断的研究では異なったレベルの学習者を同一時点で考察対象とすることで習得を検証するが、更に信頼性の高い習得順序を示すためには、併せて特定の学習者の習得状況を縦断的に研究していくことも必要である。

今回は韓国語話者のみについて分析したが、今後、英語話者、中国語話者のデータとの比較を行うつもりである。

注

- 1) 「KYコーパス」とは文部省科学研究費補助金・基盤研究『第二言語とし

ての日本語の習得に関する総合研究』（研究代表者カッケンブッシュ寛子）
において鎌田修氏と山内博之氏が中心となって行ったOPIの文字化資料を
指す。

- 2) 「のだ」には「んだ」「のです」「んです」等文体上異なるものも含める
ことにする。以下の用法も同様。
- 3) これは残留孤児について話している場面で、この文からだけでは再認識と
区別が付きにくい、文脈より再認識でなく発見であると判断した。
- 4) これは旅行社で旅行をキャンセルする際に、お金を返して欲しいと依頼し
ている場面で非難では不適切なため、誤用とした。

参考文献

- 鎌田修（1999）「KYコーパスと第二言語としての日本語の習得研究」『第二
言語としての日本語習得に関する総合研究』科研研究報告書08308019 代表
者 カッケンブッシュ寛子、pp.227-237
- 金銀淑（1989）「連体修飾構造における『トイウ』の意味機能」『国語学研究』
29、東北大学文学部『国語学研究』刊行会、pp.21-34
- 田中真理（1999）「OPIにおける日本語ヴォイスの習得状況：英語・韓国語・
中国語話者の場合」『第2言語としての日本語の習得に関する総合研究』、
pp.335-350
- 坪根由香里（1994）「『もの』『こと』『の』に関する考察 -その意義素を
求めて-」、未公刊修士論文、南山大学
- 坪根由香里（1997）「『ものだ』『ことだ』『のだ』の理解難易度調査」『第
二言語としての日本語の習得研究』創刊号、pp.137-156
- 坪根由香里（2000）「日本語教育の読解教材における『こと』の分析」『小出
記念日本語教育研究会論文集』8、pp.53-67
- 野田春美（1997）『「の（だ）の機能』くろしお出版
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 吉田茂晃（1988）「ノダ形式の構造と表現効果」『国文論叢』15、神戸大学
文学部国語国文学会、pp.46-55
- 『基礎日本語学習辞典（韓国語版）』（1987）時事英語社
- 『朝鮮語大辞典上巻』（1985）大阪外国語大学朝鮮語研究室編、角川書店

（国際基督教大学日本語教育課程）